

<近畿地区>

～古くからの茶生産地を守るため、より収益性の高い経営を模索～

1 農業経営の概要

就農地	京都府
氏名(年齢)	小島 康稔(32歳)
営農類型(規模)	工芸農作物(茶120a)
農業経営開始時期	平成26年4月
労働力	1名(本人)※農繁期は臨時雇用2名



2 就農までの経歴・就農のきっかけ

- ① 京都府出身。江戸時代後期から続く茶農家に生まれ、子どもの頃から家業を継ぐことを意識。高校卒業後に府の茶業研究所で1年間研修を受けるも、研修終了後は異業種の人に就職。その後、茶問屋に転職。異業種や茶問屋での勤務経験が、家業を見直すきっかけとなる。
- ② 31歳のとき、茶問屋を退職。実家の茶園とは別に、高齢化で管理できない近隣農家の茶園を借りて、自らの経営を開始。施肥機、トラックの取得及び経営の立ち上げに必要な運転資金として青年等就農資金を借入。

3 営農において工夫している点・資金を利用した効果など

- ① 肥料投入量や茶葉の収穫量などをパソコンで管理し、茶園別の収益性を把握するようにしている。これまでは経験と勘に頼っていたが、データをとることで、より正確に収益性を把握できている。
- ② 機械による省力化を進め、規模拡大に備えている。青年等就農資金を利用し、自走式施肥機を取得したことは、肥料散布にかかる時間の短縮につながった。
- ③ 一方で、茶摘みは機械摘みだけでなく、単価のいい手摘みも組み合わせ、バランスよくやっていきたいと考えている。

4 今後の経営展開(抱負)

- ① 後継者のいない農家が多くなっており、近隣の茶園を守る意味も兼ねて、規模拡大を図っていき、将来的には法人化したい。
- ② 自家所有の工場では玉露や煎茶の荒茶加工しかできないため、需要の多いてん茶の荒茶加工ラインを設置し、外部に委託するコストを削減したい。